

**被覆肥料の溶出後の殻を圃場外
へ流出させない様注意して下さい。**

日本肥料アンモニア協会

被覆肥料(肥効調節型肥料)の特性・効果は

- きめ細かな肥効コントロール(省力化)
- 肥料の吸収効率が低い
- 溶脱・流亡・脱窒・揮散が少ない
- 追肥の省力
- 作物の生育収量の安定・品質の向上に貢献
- 施肥回数減少 → 農作業の負担軽減
- 施肥量の節減・追肥労力の軽減 → 農業経営の効率化
- 過剰施肥による環境汚染防止(環境への負荷軽減)

等色々あります。

被覆肥料の殻を圃場外へ流出させない 対策について

－ “農業濁水流出禁止”の取り組みの例－

水田から濁水と被覆肥料の溶出後の殻を流出させない！

濁水には、肥料養分や有機物などがふくまれています。
濁水の流出は、水田からこれらの大切なものを失うと同時に
前年の被覆肥料の殻が流出する場合があります。

水環境の悪化

浅水で代かき(水面被度20～30%)
→ 田植え前に自然減水で水位を調整しましょう

水田から濁水を流出させない様注意しましょう。

併せて、水田から被覆肥料の溶出後の殻を流出させない様注意しましょう。

“代かき”の方法

「稲作技術指導指針」より抜粋

● 代かきのポイント

- ①作業は、濁水流出の危険性を低くするため、浅水1回代かきとする
- ②代かきによる濁水の発生を削減するため、水面被度20～30%（土が約70%～80%見える）浅水状態で作業を行う
- ③作業は、枕地の土の移動を最小限とする為、一行程おきにおこなう

● 水田ハローによる代かき作業

水田ハロー（注：ドライブハロー）による作業は原則として、作業速度約0.4m/s（3速）、PTO変速速度数1速で、作業工程1回とする。

尚、周辺の作業工程は2回とする。

● その他の作業時の留意事項

- ①田植え前の強制落水は避け、自然減水で調整する。移植時の水深が3cmなら、移植精度に影響を及ぼさない
- ②中干しは、出来るだけ強制落水は行わず、自然減水とする

● ロータリによる代かき作業

ロータリーによる作業はまず、作業速度約0.6m/s（4速）、PTO変速速度数2速で、作業を1回行ってから、周辺の作業を2回行うとする。そして、均平板（レーキ）をセットして、仕上げ作業を行う。

濁水を流さず、上手に肥料と水を使うには？

● 畦畔管理

- ・あぜ塗りの実施やあぜ波シートの設置などをおこなひましょう。
- ・尻水戸周辺をていねいに踏み固めましょう。
- ・止水板は畦より高くなるように設置しましょう。

● 代かき

- ・入水時まで田面の高低差をなくしましょう。
- ・代かきは浅水で行いましょう。
- ・強制排水を行わず、自然減水により水位調整を行いましょう。
- ・水を大切に使い、水の節減に努めましょう。

● 田植え

◎絶対に田植え前の落水はしない(田植え前の水位調整は、自然減水により行いましょう)

● 施肥

- ・施肥基準を守りましょう。
- ・緩効性肥料を利用しましょう。
- ・施肥田植え機による側条施肥を行いましょう。

“代かき”の方法

「稲作技術指導指針」より抜粋

● 代かきのポイント

- ①作業は、濁水流出の危険性を低くするため、浅水1回代かきとする
- ②代かきによる濁水の発生を削減するため、水面被度20～30%（土が約70%～80%見える）浅水状態で作業を行う
- ③作業は、枕地の土の移動を最小限とする為、一行程おきにおこなう

● 水田ハローによる代かき作業

水田ハロー（注：ドライブハロー）による作業は原則として、作業速度約0.4m/s（3速）、PTO変速速度数1速で、作業工程1回とする。

尚、周辺の作業工程は2回とする。

● その他の作業時の留意事項

- ①田植え前の強制落水は避け、自然減水で調整する。移植時の水深が3cmなら、移植精度に影響を及ぼさない
- ②中干しは、出来るだけ強制落水は行わず、自然減水とする

● ロータリによる代かき作業

ロータリーによる作業はまず、作業速度約0.6m/s（4速）、PTO変速速度数2速で、作業を1回行ってから、周辺の作業を2回行うとする。そして、均平板（レーキ）をセットして、仕上げ作業を行う。

現在、被覆肥料製造各社は
溶出機能の安定性維持を保ちつつ、肥料成分が
溶出した後の殻の崩壊促進を図るため、被膜材
質等の研究を推進し、その転換を図っております

